

7. コロンビアの非日常 2 その2 「おぢばがえり：実家への里帰り」

前回(本誌5月号)の終わり部分を受けて、コロンビアからの「おぢばがえり」に焦点を合わせた話をしたい。

コロンビアからの日本への旅行は、今も昔も、一般的には稀な地域への旅に入るだろう。また日本からも、航空チケット代は高額で、旅行時間も他の中南米の国々と同等もしくはそれ以上に長い。よって、推察の域を出ないが、昔はごく限られた人たちの旅だったようである。

コロンビア在住日本人及び日系人は、移住50周年記念で訪日団を結成した(正式名称「コロンビア日系人移住50周年記念里帰り団体」)。これは、組織的な日本旅行の初めだったと言われている(1979年7月)。

天理教コロンビア出張所が開設されて14年後の1986年、教祖百年祭団参として、初めて訪日「天理教団参」が行われた。

コロンビアの「おぢばがえり」団には次の3つのコースが編成されたという。



教祖百年祭コロンビア団参見送り
(現地カリ空港)

Aコース:1カ月観光コース
(日本を知らない人のためのコース)

Bコース:1カ月里帰りコース
(観光をしない人のためのコース)

Cコース:2カ月里帰りコース
(主に家族訪問が目的の人のためのコース)

これらは、それぞれ団参客の要望に基づき計画されたようである。調べてみると日系の方が多いと思いきや、現地コロンビア人も名簿上かなりいた(計46名)。その名簿は久保叔之コロンビア出張所前理事長の編集になる『コロンビアの道50年史草稿(仮称)』(2015年)に掲載されている。

それによれば、Aコースは大人15名(日系6名、コロンビア人9名)、Bコースは大人4名、子供4名(日系人3名、コロンビア人5名)、Cコースは大人16名、子供7名(日系人20名、コロンビア人3名)であった。各コース長、つまり引率責任者は当時の天理教コロンビア出張所の理事が担当した。

このコースの日程の概略を、Aコースを中心に紹介する。

Aコース日程(但し26日まではB、Cコースも同じ)

6月20日:カリ発 ボゴタ経由 ロサンジェルス着

6月21日:ロサンジェルス発

6月22日:成田着(17:00) ホテル

6月23日:ディズニーランドー成田発(17:20)ー伊丹着(18:20)ー天理(バス) 神殿参拝ー38母屋

6月24日:休憩(午後)本部施設見学、おぢば紹介ビデオ、スペイン語での教理講話拝聴

6月25日:奈良観光、(午後)天理シャープ工場見学、(夜)海外布教伝道部部长招宴

6月26日:本部月次祭参拝、(午後)自由行動(夕方)B・Cコース解散、それぞれ個々の日程

6月27日:天理ー京都ー大阪港ー(関西汽船泊)

6月28日:松山港ー松山観光ー広島宇和、(午後)マツダ工場見学ーホテル

6月29日:広島平和公園、原爆資料館、(午後)宮島厳島観光ー広島発ー(夜行)

6月30日:名古屋ー伊勢鳥羽ー鳥羽観光ー水族館ー移民船「ブラジル丸」見学ーホテル

7月1日:真珠島見学ー鳥羽発ー伊良湖ーフラワーセンター

ー豊橋ー東京ーホテル

7月2日~5日:東京観光、6日:東京発ー台北着、7日~9日:台北観光

7月10日~11日:香港観光、12日~13日:バンコク観光

7月14日~16日:シンガポール、17日~18日:ホノルル

7月19日:ロサンジェルス、20日:ロスーボゴターカリ着

Aコースは日本の他、台湾・香港・タイなどのアジア諸国の観光を行っている。というよりも、最初から観光が旅行の目的であると思われる。元所長の立場で言わせてもらおうと、当時のこの団参名簿には「理事関係(家族)」以外、現在天理教に関わっている氏名は見当たらない。短絡的に見てはいけなくのだけれども、観光が一番の目的でおぢばがえりがオマケの「観光ついでにおぢばがえり」と、おぢばがえりが主目的で空いた時間に観光するという「おぢばがえりついでに観光」とでは、意識においてかなり異なるように推察する。

したがって、Aコースのような「観光ついでのおぢばがえり」となれば、信仰の継続を考慮したり自発的に教えに関わっていったりすることは少ないように考えている。現にこの3コースの中のCコース参加者は、天理の近郊の観光をしているのだが、資料によると後半26日から大人も「こどもおぢばがえり」に参加と記されている。

旅行とバカンスへの希望や思いについて、コロンビア人のインタビューを前回で紹介した。その中でも回答者DとEは「(おぢばがえりは)私の旅行を良くするため、必然的なものだったのです」や、「旅という言葉は、知っている場所や知らない場所に行くこと。そして、色々なことを観察したり、学んだり、味わったりする個人の経験を積むこと」という価値観を持っていた。そういう人たちは、単に旅行するだけではなく、体験や学びをプラスした旅を希望し、知人が薦める「天理」を訪れてみたい、天理の教えを知ってみたいという興味と彼らの旅にたいする価値観がマッチしたのではないかと推測する。

現在でも、海外からのおぢばがえりは「日本」の「観光」や「学習」という副目的が付随しており、帰参日程には多少なりとも時間が設けられている。

おぢばがえり考

平成23年度公開教学講座「現代社会と天理教」の中で井上昭洋教授は「おぢばがえりの巡礼論」を展開され、学術的に理路整然としたおぢばがえりを分析されている。敬虔な信者にとってのおぢばがえり論である。

これとは別にコロンビアの団参でもあるように、「里帰り」という意義を一面に表した「訪日」もまた、おぢばがえりの一つの性格であるようにも考える。本通りがアーケードもない頃の写真をみた時があった。本通り界限は人、人で賑わって、幟を立てて本通りを行進する団体もあった。憶測で申し訳ないが、おぢばがえりが一つの娯楽や楽しみという要素もあったに違いない。その証拠に芝居小屋やサーカスも興行していたと聞く。

海外では、「おぢばがえり」は信者だけでなく、信仰間もない人も、また未信者や子供を含めて、一つの非日常を体験する機会だと考える。そして「おぢばがえり」をする人たちには、だれもが一人残らず喜んでいただくことを目指しているのが教祖のお心なのである。

「この家へやって来る者に、喜ばさずには一人もかえされん。親のたあには、世界中の人間は皆子供である。」

[註]

(1) 井上昭洋「おぢばがえりの巡礼論」『グローバル天理』、2011年12月号。

(2) 『稿本天理教教祖伝』第三章「みちすがら」参照。